

大津
歴博
だより

2024
No.
133

contents

企画展
P1～P3

紫式部と祈りの世界

コラム
P4～P5

古代の硯
～大津市内の出土品から～

収蔵品紹介
P6

融大明神由来記
(龍家文書・当館寄託)



大津市歴史博物館

令和6年3月8日 発行

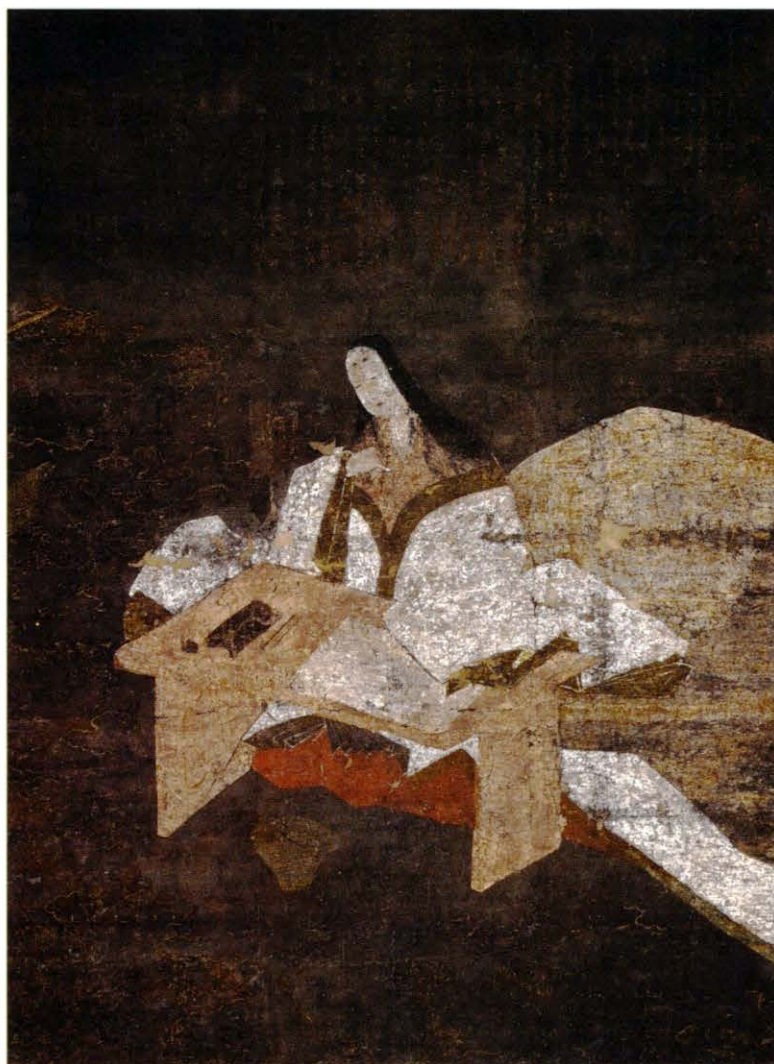
〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

企画展 **紫式部と祈りの世界**

会期：令和6年(2024)4月27日(土)～5月19日(日)



【写真1】^{むらさきぶ せいぞう} 紫式部聖像 紙本著色 室町時代(15世紀) 石山寺蔵

古くから石山寺に伝わる紫式部の肖像画で、近代以前で現存する紫式部の古い肖像画作例の中では最大級の大きさを誇ります。画面中央に紫式部の姿を大きく描き、上部には、紫式部や『源氏物語』起筆にかかる内容が金泥で書かれています。さらに、紫式部の周囲には、『源氏物語』の中から、いくつかの場面がやはり金泥で描かれています。

展示の概要

本館では、令和6年4月27日(土)から5月19日(日)までを会期として、企画展「紫式部と祈りの世界」(以下、本展と称します)を開催します。これは、令和6年1月7日(日)から放映が始まった大河ドラマ「光る君へ」に関連して開催するもので、すでに本館では、本年1月10日(水)から令和7年2月2日(日)までを会期として、常設展示室・ロビーにおいて特集展示「源氏物語と大津」を開催しているところです。

特集展示「源氏物語と大津」では、紫式部の人物像や、石山寺における『源氏物語』起筆伝承、そして『源氏物語』に関する美術品を中心に展示し、『源氏物語』と大津の関わりについて解説しています。

一方、本展では紫式部が生きた時代の仏教文化について紹介する予定です。というのも、平安時代は仏教が非常に篤く信仰されており、仏事が盛んに行われていました。『源氏物語』の中でも御修法や仁王会、灌仏会、仏名会、法華八講のほか、様々な加持・祈祷が行われたことが書かれています。そこで本展では、特に仏教文化の視点から、紫式部が生きた時代を紹介します。

展示の構成

本展は、大きく3つのテーマで構成しています。1つ目は、紫式部を取り巻く人々に焦点をあてます。その人々とは藤原道長(966～1027)と、その娘の彰子(上東門院、988～1074)です。紫式部は、藤原道長に召し出され、彰子の女房として宮中に上がりました。そして、彰子からの依頼により『源氏物語』を執筆したとされます。つまり、紫式部にとってこの2人は大変重要な人物であったことがわかります。そこで、藤原道長とその娘の彰子に関する仏教美術の名品を展示します。

2つ目は、大津市内に現存する、紫式部が生きた時代に制作された仏教美術を紹介します。この時代は、観音信仰が隆盛すると同時に、末法思想の広まりによる浄土信仰へと傾倒していく時代でした。そこで、大津市内に伝わる平安時代中期から後期にかけて制作された観音菩薩と阿弥陀如来の優品を展示します。

3つ目は、紫式部その人に対する信仰を紹介します。紫式部は『源氏物語』の作者として当時から著名でした。しかし一方で、平安時代の終わり頃には、架空の物語を書いた罪で地獄に堕ちたと考えられるようになりました。

そして、地獄に堕ちた紫式部を供養するために「源氏供養」という法要が営まれました。この「源氏供養」を中心に紫式部その人への信仰について紹介します。

大津の地で千年ぶりの再会

ここでは紙面も限られるので、1つ目のテーマである道長と彰子について簡単に紹介したいと思います。この2人と仏教との関わりについてはどのようなものだったのでしょうか。

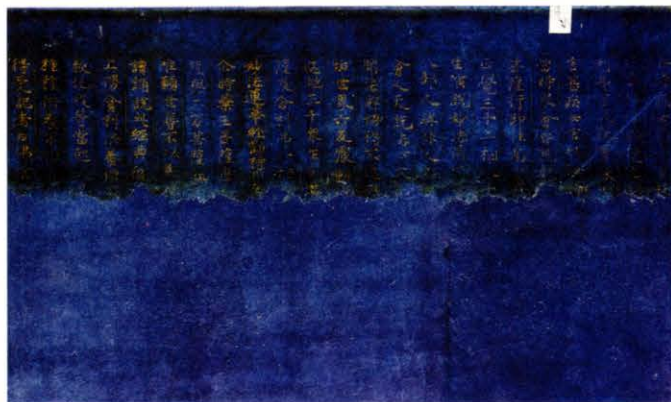
それを示す大変貴重な遺品が、所蔵者のご厚意により、本展に出陳される運びとなりました。まず1つ目が、道長が作った経筒(経典などを中に入れて地中に埋めるための筒)です【写真2】。これは、金峯山(奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳)から江戸時代に出土したもので、現在は国宝に指定されています。本体は金銅製で表面は鍍金がされており、中には法華経などの経典が15巻納められていました。そして、本体の側面には道長による願文が記されており、経筒の制作意図や作った時期などが読み取れます。さらに、中に納められていた経典は、長徳4年(998)に道長自身によって書写されたもので、下半分が欠損してしまっていますが、当初の煌びやかさを知るには十分で、この経典についても一部が本展に出陳されます【写真3】。これらは、道長自身によって発願・制作され、道長が実際に吉野の金峯山へ参詣し、山頂に埋めたものであることが、道長の日記である『御堂関白記』にも記されています。

この経筒が埋められた金峯山は、役行者によって開かれた修験の中心地の1つで、古代より山岳信仰の聖地として信仰を集めていました。また、56億7千万年後にこの世に現れる弥勒菩薩の浄土とも考えられていました。経典を地面に埋める行為は「埋経」といい、それは56億7千万年後に弥勒菩薩がこの世に現れ、人々に教えを説く際に使用してもらうための保存が目的だったと考えられており、道長の例はその最初期のものとして注目されています。

そして、その信仰は娘の彰子にも引き継がれました。2つ目は、その彰子が作った経箱です【写真4】。比叡山延暦寺の横川・根本如法堂に奉納されたもので、こちらも国宝に指定されています。この経箱は、蓋と身で構成される直方体で、蓋の中央には「妙法蓮華経」の文字が、蓋と身の表面には宝相華文が陰刻され、さらに金銀の鍍金が施された日本工芸史の中でも最も優美なものの1つとされています。



【写真2】 国宝 金銅藤原道長経筒 1口 伴延助作
寛弘4年(1007) 金峯神社蔵



【写真3】 重要文化財 紺紙金字法華経巻残闕
長徳4年(998) 金峯神社蔵



【写真4】 国宝 金銀鍍宝相華文経箱 1口
長元4年(1031) 比叡山延暦寺蔵

こちらについては、道長の経筒のように願文は彫られていませんが、「女院願文」という記録が残されています。それによれば、長元4年(1031)に道長の娘の彰子が、やはり弥勒菩薩が現れる未来のため、自ら書写した法華経8巻を納め、根本如法堂に奉納したことが判明します。彰子直筆の經典は残念ながら朽ちて残っていませんが、場所こそ違えども、父・道長の意思を継ぎ、同様に法華経を書写し奉納していることから、道長の影響が強く見られます。本展では、朽ちてしまった彰子直筆法華経の代わりとして、比叡山延暦寺に伝わる重要文化財の法華経2件(伝円仁筆、伝円珍筆、ともに平安時代)も展示します。これらは紺に染めた紙に金や銀で經典を書写した荘厳なもので、平安時代の美意識を間近に感じることができます。

展示室では、石山寺に伝来する最古の紫式部の肖像画とされる紫式部聖像【写真1】と、藤原道長・彰子親子の遺品とが、史上初めて一堂に会します。大河ドラマ「光る君へ」を契機として、紫式部・藤原道長・藤原彰子という主要人物たちが、遺品を通じて千年ぶりに出会うこの機会をぜひお見逃しのないようご覧ください。

紫式部と祈りの世界

紫式部が生きた平安時代中期は、観音信仰の高まりから西国三十三所に代表される各地の観音菩薩の霊場を巡る観音巡礼が盛んに行われました。さらに、比叡山横川の僧である恵心僧都源信(942~1017)によって『往生要集』が著されたことで、極楽往生を願う浄土信仰(阿弥陀信仰)が盛んとなり、それは道長による九体阿弥陀堂の建立(無量寿院。のちの法成寺)に端を発し、孫の藤原頼通の平等院鳳凰堂へとつながっていきます。本展では、大津市に伝わる平安時代中期から後期にかけて制作された観音菩薩や阿弥陀如来の像もあわせて展示します。紫式部はどのような景色を見て『源氏物語』を書くに至ったのか。平安の世に広がった祈りの世界を、展示室で感じていただければ幸いです。

(学芸員 鯨井清隆)

古代の硯 ^{すずり} ～大津市内の出土品から～

『源氏物語』起筆伝承で有名な石山寺には、紫式部が使ったとされる古硯が伝わっています。これは、横型の長方形の硯で、墨を磨る部分は円形に左右に2つ並び、濃淡2種類の墨を使い分けることができたようです。墨をためるくぼみの部分は、一方に牛、もう片方に鯉がモチーフとして彫られています。さらに、硯の周囲には、細かな文様が彫りこまれています。

この古硯を本当に紫式部が使ったのかについてはさて置き、多くの和歌を含む長編の物語を執筆した紫式部にとって、いつもそばに置いていた重要な文房具として硯があったことは間違いのないでしょう。紫式部ゆかりの品として、石山寺に硯が伝わっているということはそれを象徴しているといえます。これにちなみ、現在開催中の特集展示「源氏物語と大津」では、大津市の遺跡から出土した古代～中世の硯を展示するコーナーを設けています。

さて、現代の日常生活で、硯を用意して墨を磨り、筆を持って文字を書くことは少なくなっていました。それでも、硯といえば、学校で使ったような黒い石製の長方形の姿を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、このような硯は、日本では主に中世以降に普及したもので、古代の国産の硯は焼き物である陶製（主に須恵器製）のものが使われていました。これを陶硯といいますが、その形は多種多様で、形状によって円面硯、風字硯、形象硯などと分けられています。大津市内の出土品から、硯をみてみましょう。

丸い形の円面硯



【写真1】 圈足円面硯
上高砂遺跡出土 奈良～平安時代
大津市埋蔵文化財調査センター蔵

古代の硯においてスタンダードな形は、上から見たら丸い形となる円面硯でした。円面硯は、墨を磨る部分を中央に置いて円形とし、その周囲に水や墨汁をためるくぼみが作られてい

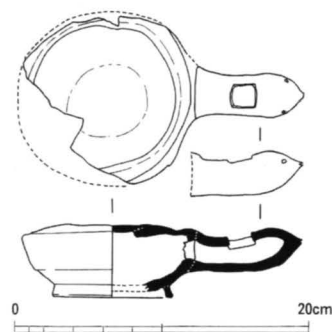
ます。下側には脚部がつくものも多く、透かし孔のある台状の脚部をもつ圈足円面硯や三足以上の獸脚をつける

ものなど、装飾性の高いものが多いことも特徴です。

大津市では、近江大津宮の時期とも重なる7世紀後半に須恵器を生産していた山ノ神遺跡（一里山三丁目）や、8世紀中頃から10世紀にかけて律令制下での官庁街として機能していた近江国府跡（大江六丁目ほか）とその周辺の関連遺跡などを中心に円面硯が出土しています。

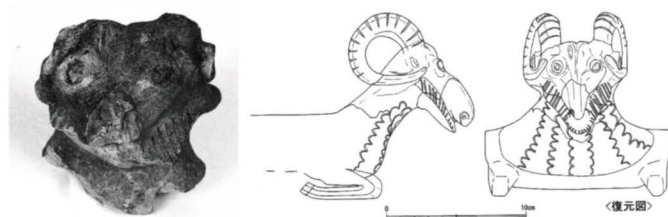
【写真1】は、上高砂遺跡（高砂町）の昭和62年（1987）度調査での出土品です。この調査では、主に平安時代の遺物がまともって出土しており、中には「南寺」と書かれた墨書土器も含まれています。周辺に古代寺院やそれに関連する施設があったと考えられている場所です。

また、山ノ神遺跡では、圈足円面硯の他に、中空円面硯も出土しています。これは、硯本体の中を空洞にしたもので、側面の片側には亀（またはスッポン）の頭部を模した把手がつけられていました。この把手の上部には穴があけられており、本体の空洞とつながっています。



中空円面硯
山ノ神遺跡出土 白鳳時代

羊の姿をかたどった羊形硯



【写真2】 羊形硯 青江遺跡採集 奈良時代 ※右は復元図
大津市埋蔵文化財調査センター蔵

全国でも出土例は少ないものの、動物や宝珠をモチーフとした硯があり、形象硯と呼ばれています。動物をかたどった硯には亀形、鳥形、羊形があり、平成30年（2018）度到大津市の青江遺跡（神領二丁目）でも羊の姿をかたどった羊形硯の頭部の破片【写真2】が見つかりました。青江遺跡は、近江国府に関連する官衙遺跡のひとつで、国府の中心施設である近江国府跡の真南に位置しています。この羊形硯は、試掘調査の際に、地表面に

出ているのを調査員が確認した採集品で、残念ながら出土状況が不明ですが、平城京の出土品と大きさや頭部のつくりがとてもよく似ています。羊形硯としては全国で12例目となり、古代の役所である近江国府の周辺で見つかったことが注目されます。

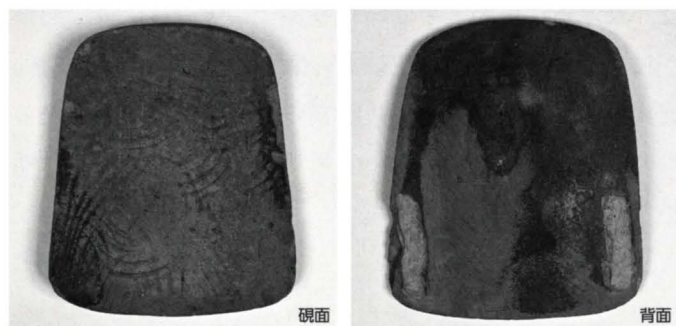
羊形硯は、平城京(奈良県)、史跡斎宮跡(三重県)のほか、白鳥遺跡(愛知県、三河国府)、ハガ遺跡(岡山県、備前国府)など国府に関連する遺跡などで主に出土が確認されており、都城や官衙の中で、位の高い人物が使用した硯と想定されています。

他の器を硯に使った転用硯^{てんようけん}

円面硯や羊形硯は、始めから専用品として定まった形で作られた硯です。これに対して、食器である杯・杯蓋^{つき つきぶた}の裏面や、貯蔵用の甕^{かめ}などの破片を、本来の用途から離れて硯として使った例も多く、これらは転用硯として区別されています。このような転用硯は、墨の痕があることや、墨を磨ったことで器面の一部が滑らかになっているため、硯として使用されたことがわかります。

瀬田川東岸の近江国府跡とその周辺の関連遺跡では、特殊な羊形硯の他、円面硯と転用硯をあわせて現在までに40例以上の硯が確認されています。羊形硯1点、円面硯14点に対して、転用硯は不確定なものも含めて27点程みられ、転用硯の方が多いことがわかります。下級役人たちの多くは転用硯を使っていたと考えられ、日常業務として硯を使って文書を作成する役人たちの姿を想像できます。

さるつら 猿面硯



【写真3】猿面硯 中畑田遺跡出土 平安時代
大津市埋蔵文化財調査センター蔵

さて、特殊な硯の例をもう一つ紹介しましょう。【写真3】は、中畑田遺跡(和邇中)の昭和61年度調査で出土したものです。この硯面や背面には、甕など大型の須恵器を作る際に、粘土を叩きのばして形を整えた工具の痕跡が

みられ、その破片を使用した転用硯にも見えます。しかし、形は整えられており、背面には2か所に脚部^はが剥がれた^{あと}痕があります。これは、特に猿面硯として分類される硯のひとつです。猿面硯は平安京や寺院、国府跡などで主に確認されています。

風字硯



【写真4】風字硯 崇福寺跡出土
平安時代 近江神宮蔵

上からみた形が「風」の字に似ていることから、風字硯と呼ばれる硯もあります。先端にくぼみを設け、背面側に脚部を付けることで傾斜をつけています。

【写真4】は崇福寺跡(滋賀里町甲)から戦前の調査で出土したものです。寺院もまた硯がよく使用されていた場所といえます。風字硯は、円面硯に遅れて登場し、主に平安時代によく使われていました。

陶硯から石硯へ



【写真5】石硯 坂本遺跡出土
室町時代
大津市埋蔵文化財調査センター蔵

平安時代中頃になると、舶来の石製の硯が貴族の間で流行していくようですが、国産の硯も陶製から石製へと変わっていきます。

大津市内の坂本遺跡や坂本城跡などで見つかっている中世の集落の遺構からは、【写真5】のような長方形や楕円形の小型のものなど、複数の石硯が出土しています。

このように、大津市内では羊形硯や猿面硯など、全国的にも珍しい硯もあり、多種多様な硯が見つかっています。古代には官衙遺跡、寺院などからの出土例が多く、貴族や役人、僧侶など特定の身分の者が硯を使用し、やがて硯を使って文字を書く層が広がっていくこともわかります。

筆、墨、紙、硯などの文房具の中で、硯は陶製や石製という材質であることから長くその形をとどめているため遺跡からの出土例も多くみられ、古代の文字文化を考える上で重要な遺物といえるのです。(学芸員 福庭万里子)

収 蔵 品 紹 介
とおるだいみょうじん ゆらい き
融大明神由来記 (龍家文書・当館寄託)

江戸時代、神社や地域の由緒(歴史)が編纂され、それが後世の人々に継承されていく。大津市域にはそうした史料(古記録)が多く残り、史実と伝承の境目が複雑で曖昧な文字の世界のひろがりをどう読み込むか、解説とともに、伝承に関する聞き取り調査も欠かせない作業となります。

さて、今回紹介する史料は、現在開催中の特集展示「源氏物語と大津」に関連するものです。本展では、『源氏物語』の主人公のモデルとされる貴族の源融みなもとのおるに関連して、大津市伊香立南庄町に鎮座する融神社の社宝「懸仏かけぼだい」などを紹介しています。これは、源融を「融大明神」としてお祀りした懸仏です。「大明神」は、人々を救済するために仏菩薩が神となってこの世に現れた名称で、つまり源融は人々を救うために「融神社」にお祀りされている、ということになります。

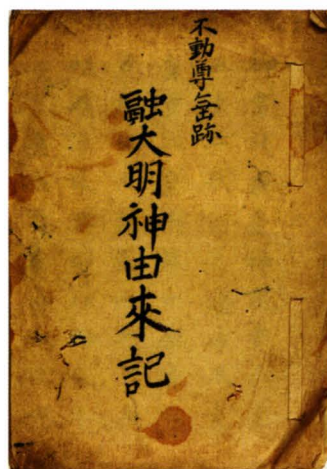
この懸仏を古文書・歴史資料を担当する学芸員として初めて拝見した時、「なぜ光源氏のモデルともいわれる源融を大明神としてお祀りしているのだろう」と、素朴な疑問がわきました。そんな疑問をもとに、あれこれと調べていると、参考となる古記録として、同地南庄町の龍家に残された「融大明神由来記」に行き当たりました。

同記は奥書に、天保2年(1831)5月、源重成が平松文次という人物の依頼に応じて書写した一冊であることが明記されています。原本は、文正元年(1466)に「式部卿」が筆写したもののようですが、実際に伝存するかはわかりません(これら3人の来歴についても不明)。

さて、同記の内容は大きく2つに分かれます。「抑当おさめどもとう社奉しやあがめ たてまつる崇神たてまつる霊者しんれい」の書き出しから始まる前半部では、「神霊」として祭祀される源融の来歴が述べられていきます。

注目点は後半部です。そこでは、源融が死後に神となって都を守護すると誓願したことが記され、次いで伊香立になじみ深い相応和尚そうおう かしうが登場します。相応は、葛川明王院かつらがわ みょうおういんを開いた人物で、「乾山」に「融の神霊」が降り立った夢を見て、それを知った朝廷は同地に勅使を派遣します。そこでさらに奇瑞きずいが起り、天台宗における「鎮守の一社」(本地仏は不動明王)に位置づけたとあります。つまり、9世紀頃に融大明神(社)が成立し、興隆していたというのです。

ただし、この由来記だけでなく、融神社に残る確かな



棟札の情報を精査すると、「融大明神」という名称が登場するのは江戸時代中頃からのようです。それまでは「南庄正一位宮」などといって、源融が祀られていた様子はみえません。つまり、源融は江戸時代中期頃に突然「融大明神(社)」として祀られたようです。このことから、歴史学の立場からも、本由来記の内容をただちに史実とは認めるのは難しいでしょう。

しかし興味深いことは、こうした伝承や記録が龍家文書にいくつもみえることです。例えば、北嶺回峰行の拠点寺院でもある同町の歓喜院(通称：瀧寺)の開帳で読み上げられた「瀧寺開帳略縁起」(19世紀作成)に、本由来記と同内容の「生土宮神鏡略縁起」が筆写されています。また融大明神(社)の行事記録「御宮年内明細帳」に描かれた境内図に「融こしかけ石」と源融に関する記述がみえます。

こうした由来記や縁起(不動明王信仰)が地元で説かれる中で、源融が繰り返して語られていくことになったのでしょうか。由来記や縁起にはそれを編まねばならない理由が存在します。同社再建のために人々に来歴を読み聞かせる必要もあったでしょう。けれども、なぜ源融だったのか。もしかすると江戸時代における『源氏物語』の読者層の拡がり関係しているのでは…とも考えられます。

ここで最初の問い「なぜ源融が祀られたか」という明確な答えにはたどり着かぬまま紙幅が尽きました。ただひとまずは、地域の伝承や歴史、人々の信仰が、長い年月の中で混ざり合ったその先に、こうした由来記や縁起が成立した、ということはいえそうです。

(学芸員 高橋大樹)